

中学生の恋愛意識と行動

宮武朗子¹・鈴木信子²・松井豊³・井上果子⁴

Romantic Love Among The Junior High School Students in Japan

Akiko MIYATAKE, Nobuko SUZUKI, Yutaka MATSUI and Kako INOUE

Abstract

Empirical studies regarding the romantic love among the junior high school students are rare, limited to sex attitude and sexual behaviour and not to the affection nor to the awareness of romantic love. Moreover there is no study of the junior high school teachers' view of romantic love of their students.

This report is part of a larger research regarding romantic love of the junior high school students. It presents the initial finding of affection, attitudes, bonding style, desires, reality and wishes of romantic love among the students.

The first survey is interview conducted to 6 teachers, focused on their view of the romantic love of their students. Based on the results, the questionnaire for the second survey were prepared. In the second survey, the questionnaire were administered to 699 junior high school students.

Results show that the junior high school students are aware enough that generally the romantic love of couples of their age aren't associated with the sex behaviour nor marriage, but in contrast to this awareness, personally, they wish to get married and realize the sexual desire as their longing for the romantic love is intense. Results demonstrate the gap between the general common sense and the personal wishes of the students.

Next junior high school teachers view their students romantic love as non lasting, while students wish to live with, get married to and perpetuate the steady relation with the loving partner. This fact is unrecognized by their teachers.

Third, the junior high school students romantic love is mostly one-sided.

Fourth, as far as romantic love is concerned, boys of this age are less active than girls.

1 教育学研究科 (Graduate School, Faculty of Education)

2 教育学研究科 (Graduate School, Faculty of Education)

3 聖心女子大学 (University of the Sacred Heart)

4 心理学教室 (Dept. of Psychology)

はじめに

〈青年期の異性関係〉

青年期の始まりとともに、急激な身体の成長と成熟がはじまり、それに伴って異性に対する気持ちにも変化が生じるようになる。この時期の同性の仲間や異性の友だちとのつきあいは、その後の対人関係に重要な意味を持つようになる（P. プロス、1962；皆川、1980；松井、1996）。本章では、小学校・中学校のそれぞれの時期における、児童、生徒の恋愛についての主な研究を紹介する。

1. 小学生における異性への関心と反発

桂（1965）は、小学校高学年になると、異性への関心が高まる一方で、異性に反発を感じたり、避けたがる傾向がみられると論述している。

加藤他（1985）は、小学生を対象に意識調査を行い、小学5、6年生の1、2割は「異性との仲が悪い」ことを悩んでおり、その傾向は、女子にやや強いと報告している。また、「男の子（女の子）は、あなたにとってどんな人ですか」という質問に対して、小学生の6、7割は、異性の児童に対して否定的な反応を示していた（加藤他、1985）。

松井（1996）は、小学校高学年の時期に、異性に対する反発や嫌悪が起こる理由として、異性への関心が高まっていること、異性との接し方のスキルが不足していること、同性の友人の目を意識すること、の3点を挙げている。

竹之内・安達（1992）は、小・中学校の児童生徒を対象に意識調査を行い、異性に関する意識が、仲良しから反発や嫌悪をへて、あこがれへと発達的变化を示すと考察している。

2. 中学生における異性への関心

日本性教育協会（1994）によると、「異性と親しくなりたい」と思っている女子は、中学1年生の段階で、既に半数以上いると報告されている。同じ欲求を経験している1年生男子が2割しかいないことを考えると、異性に関する関心は、女子の発達の方が早いと推定される。しかし、男子もその後、1年生から3年生にかけて「異性と親しくなりたい」と思う者が急増し、3年生になると7割弱が「異性と親しくなりたい」と思うようになる。

NHK世論調査部（1984）によると、「好きな女子がいる」と回答した中学男子は、1年生では3割弱にすぎないが、学年が上がるにつれて増加していき、3年生では4割に達していた。女子は、1年生の段階で、既に4割が「好きな男子がいる」と回答しており、2年生からその比率が急増し、3年生では5割強にまで達していた。しかし、「1対1でつきあっているBF・GFがいる」と回答した中学生は、1割弱にすぎず、「キス」の経験がある者も1～3%にすぎなかった。異性に関心を持ち、異性と親しくなりたいと望んでいる中学生は多いが、実際に交際している者は少なく、そのほとんどが片思いにとどまっている。

中学生を対象にした性意識の調査（東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会、1993）によると、「異性と1対1でつきあっている」中学生の7割弱が、つきあっている

異性の立場を「恋人」もしくは「結婚したい相手」であると回答していた。また、3年生の8割弱がキス願望を持っており、同じく5割強（男子7割強、女子4割）が性交願望を持っていると報告されている。実際に、キスを経験している者の半数は、相手を「好きだったから」「愛しているから」といったはっきりした自分の考えを持ってキスを経験していると報告されている。

3. 中学生の恋愛の特徴

松井・井上（1994）は、中学生の恋愛の特徴として、タレントやスポーツ選手、年上の先輩など、直接話をしたり、お互いの気持ちのやりとりをしにくい相手に憧れることを挙げ、そのような相手に自分の理想の恋人像をダブらせ、相手の現実の姿には直面していないと指摘している。そして、この状態を『恋に恋している』ことに憧れている状態』と表現している。

桂（1965）は手記分析に基づき、次の4点を中学生の恋愛の特徴として挙げている。

第1に、中学生は「異性」という理由だけで、自分とほぼ同じ年代の全ての異性を意識するようになる。それは好意を感じる特定の異性がいるようでないような状態である。桂は、このような状態を「愛情の不特定状態」と命名している。

第2に、中学生は異性に対する気持ちを自分の胸の中に抱いているだけで、それを積極的に相手に伝えるという具体的な行動をとらない。桂は、このような片想いにみられる状態を「平行的恋愛」と命名している。

第3に、中学生はちょっとしたことをきっかけに異性に魅力を感じては、その異性を好きになり、やがて、ちょっとした原因から、その魅力が薄れてしまい、他の異性に愛情を向ける。このように次から次へと好きな対象や憧れる対象が変わるこの時期を、桂は「愛情の試行的遍歴期」と命名している。

第4に、学校の先生や先輩に対する憧れ、タレントやスポーツ選手への追っかけ、同性の先輩に対する同性愛的な愛情など、年上の異性（場合によっては同性）に対して恋愛に似た強い憧れを感じる。この時期には、同年代の異性に愛情を向けることに抵抗が生じるため、それを代償する形で、年上の者に愛情を向けると考えられている。桂は、このような愛情を、年長者への「代償的愛情」と命名している。

以上のように、中学生の恋愛の分析は大変興味深い。しかし、桂の議論は現在まで実証的な確認が行われておらず、どれも推定の域を出ていない。特に、桂の時代から30年間の時の流れを考慮に入れると、この間に性意識に変化がみられたように（日本性教育協会、1994）、桂が記述した恋愛感情にも時代的变化がみられる可能性が考えられる。本研究では、これらの可能性を考慮して、中学生の恋愛に対して実証的なデータによる確認を行っていききたい。

4. 本研究の目的

中学生を対象とした恋愛研究は、性意識や性行動についての調査報告がなされているだけで、恋愛意識や恋愛感情に焦点をあてた研究はほとんどみられない。また、中学生にとっ

て最も身近な存在である教師が、彼らの恋愛をどのように捉えているかについての議論もなされていない。これらの現状を踏まえて、本研究では、一連の調査を通して、中学生の恋愛意識を明らかにし、教師と生徒とのズレを検証することを目的とする。具体的な方法としては、まず、中学校教師に対して面接調査（第1調査）を行い、中学生の恋愛意識に関する教師の認識を分析する。その結果に基づき、中学生を対象とした意識調査（第2調査）を実施する。本研究では、第2調査の結果の中から、中学生の一般的な恋愛意識と恋愛行動、好きな異性への感情やその異性との行動に関する分析結果を中心に報告する。

第1調査

<目的>

中学生の恋愛を教師がどのように捉えているかを明らかにすることを目的とする。

<方法>

1. 調査対象：神奈川県下の中学校男性教師6名（平均年齢42.5歳，教員歴11～26年）。
2. 調査時期：平成7年1月25～27日。
3. 調査方法：半構造化面接を個別に実施した。面接は横浜国立大学第一研究棟教員室にて、第1筆者及び第4筆者の2人によって行われた。面接中の会話は、被調査者の了解を得てテープレコーダーに録音された。所要時間は1時間程度である。
4. 調査内容：調査内容は、以下に示す通りである。

表1 調査内容

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 回答者の属性（年齢，教員歴，担任経験のある学年など） 2. 在職校の属性（性学年別の在校生数，各学年のクラス数，教員数など） 3. 異性交際に関する校則（校則の有無とその内容） 4. 異性交際に関する指導（内容とその実行） 5. 異性交際の指導に関する意見（悩みや問題） 6. 生徒の異性観や異性への行動に関する認識 |
|--|

<結果>

被調査者である教師（以下、「教師」と表記する）は、中学生の恋愛を彼らの恋愛行動と恋愛感情（恋愛意識），そして交際の持続性の3側面から捉えていた。

1. 恋愛行動

恋愛行動の面からみると、生徒の恋愛は学校の行き帰りを共にしたり、話をしたり、相談をしたりする程度のつきあいにとどまっており、肩や腕を組んで歩いたりすることはなく、マスコミで騒がれているような性行動へと進展するつきあいではないと認識している。特に性行動については、一般の中学生が男女交際（中学生の恋愛）から性行動にかかわることはないと認識しており、中学生の性行動はもっぱら問題行動（性非行，性被害）との

関連でのみ語られていた。

具体例としては「(中学生の恋愛は)大人が見ても、純真で清い交際だと思いますよ。手をつないでいるのも見たことないですし、学校の中で二人きりでいるとか、休み時間に一緒にいるとかも見たことないですよ。」(NO6, 対象者番号, 以下同様), 「好きな子がいて、帰り道が同じ方向だったら、一緒に帰ったりとかは見たりしますよ。その位のことはね。それこそ、恋愛じゃなくて男女交際だと思うんですけど。何となく恋愛というのはもう少しそれが発展すると、言葉としては捉えています。まず、恋愛なんて言葉は出てこないですよ、中学の中では。」(NO5), 「純粋な交際からそういうふうに(性行動へ)発展していく例はまずないと思います。(中略)中学生がお互い好きになって子どもができることは稀で、セックスが関わると非行につながっている。」(NO4)が挙げられる。

2. 恋愛感情(恋愛意識)

恋愛感情(恋愛意識)の面からみると、生徒自身は自分の好きという感情を、本物の恋愛感情として捉えているが、彼らの感情は恋に恋する気持ちや「友達」感覚であって、大人の恋愛のように将来的な展望や結婚を意識した恋愛感情ではないと認識していた。

具体例としては「好きという気持ちで、恋に恋しているというか。(中略)子どもにしてみればその差というのはわからないですから。子どもなんかの考えからすれば、大恋愛まではいかないにしても、結構それに近い気持ちだと思いますけど。」(NO5), 「大人の恋愛のように、結婚をしたいとか、一緒にいたいとか、二人の子どもがほしいという感情じゃないと思う。そばにいて話をしたり、相談をしたりといった友達感覚なんだと思いますよ。その友達感覚からさらに発展することは少ないんじゃないかな。」(NO1), 「恋愛感情ではないですからね。要するに男女交際ですよ。男女交際と恋愛とは違うじゃないですか。恋愛というのは、結婚へつながっていくもので、男女交際は結婚へはつながらない。素敵な人とお話ができればいいなことだと思いますよ。」(NO6)が挙げられる。

3. 交際の持続性

交際の持続性の面からみると、中学生の恋愛のほとんどが、高校進学やクラス替えなどの環境の変化をきっかけに、それまでの関係や気持ちを維持できなくなると認識していた。生徒たちは結婚にまで至る持続的な関係を持つことを意識しておらず、むしろその一時的な関係を自分たちの恋愛パターンとして楽しんでいると指摘している。

具体例としては「中学でつきあっていた子たちが高校でつきあうことは稀で、結婚することもほとんどないと思う。環境が変わると別の好きな子が出てきて、そっちへの好きが強くなるんじゃないかな。環境に左右されてしまうのでしょうか。」(NO1), 「つきあう相手がコロコロ変わる交際を楽しんでいる。(中略)相手を変えて、お互いそんなことで傷つけあっていない。大人が考えているほど深刻に考えていないと思いますよ。」(NO4), 「卒業したらおしまいぐらいの程度のつきあいで、離れてまでもその関係が続く恋愛のレベルではなくて、学校での楽しみの一つですよ。」(NO5)が挙げられる。

<考察>

中学生の恋愛行動は学校の行き帰りを共にする程度のものであり、性行動へと発展することはないと、教師は認識していた。中学生の恋愛感情（恋愛意識）は、中学生自身が考えているほど本物の恋愛感情ではなく、恋に恋する気持ちや友達感覚といったものである。中学生は、結婚を意識した永続的なつきあいは考えておらず、環境の変化などによって、それまでの関係や気持ちが容易に変わりやすいと、教師は認識していた。

以上のように、教師は、中学生の恋愛の特徴を挙げて、彼らの恋愛を「恋愛」ではなく、異性の友達としての交際、つまり「男女交際」であると主張していた。教師が言う「恋愛」とは、結婚を意識した成人の恋愛を意味しており、「男女交際」はその前段階であって、「男女交際」が発達して「恋愛」になると考えられていた。

東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会（1993）の結果からみると、中学生の恋愛は、教師が考えているほどおとなしいものではなく、中学生にとって、自分自身の恋愛は、成人の恋愛と違いのない本物の恋愛であるという意識が強いものと推察される。

中学生の恋愛である「男女交際」を一つの恋愛の形として認められない教師と、自分たちの恋愛を本物の恋愛として考えている生徒との間には、恋愛意識についての認識に乖離があるものと推定される。

第2調査

<目的>

第1調査の結果を踏まえて、中学生の恋愛意識や恋愛行動、及び好きな異性への気持ちや行動を明らかにすることを目的とする。

<方法>

1. 調査対象：神奈川県下の公立中学校6校の1年生から3年生の生徒699名（男子362名、女子337名）である。学校の選定にあたっては、特定地域に偏ることのないよう複数校とし、男女の数がほぼ同数になるように留意した。各学年の内訳は、1年生281名（男子142名、女子139名）、2年生218名（男子116名、女子102名）、3年生197名（男子103名、女子94名）であった。

2. 調査時期：平成7年2～3月。

3. 調査方法：集合配布回収、個別記入形式の質問紙調査を実施した。質問紙は、被調査者の性別に合わせて男子用、女子用の2種類が作成された。教師が各教室で調査用紙と回収用の封筒を配布し、被調査者は自分の性別用の調査用紙に記入した後、回収する形式で行われた。所要時間は20分程度である。

4. 質問紙構成：質問紙の構成は、表2に示す。まず、被調査者の関心事や友達とのつきあい、恋愛に関する意見や行動を尋ねた後、好きな異性や最も親しい異性を一人想定させ、その人物に対する気持ちやその人物との行動について尋ねた。さらに、親の養育態度や問題行動念慮、自己評価について尋ねている。

表2 質問紙の構成

1. 所属学年	11. 憧れている異性の有無とその立場
2. 中学生の関心領域	12. 好きな異性の有無とその関係
3. クラスや学年, 学校の雰囲気	13. 好きな異性への恋愛感情
4. 友達とのつきあい方	14. 好きな異性との恋愛行動
5. 恋愛に関する会話	15. 好きな異性のイメージ
6. マスコミからの恋愛情報への態度	16. 恋愛による内的成長
7. 恋愛・キス・セックスのイメージ	17. 親の養育態度
8. 恋愛と性・結婚との結びつき	18. 問題行動念慮
9. 恋愛や恋愛行動への積極性	19. 自己評価
10. 恋愛対象の遍歴性	20. 身長

<結果>

1. 中学生の恋愛に関わる意識や行動

中学生の恋愛に関わる意識や行動について、まず性別に比率を算出して、 χ^2 検定を行い、性差についての検討を行った後、さらに性別毎に学年別の比率を算出して、 χ^2 検定を行い、学年差について検討した。以下には、性別の比率は全て提示し、学年別については5%水準の有意差がみられた項目のみを提示する。

(1) 中学生の関心領域

どのようなことに関心を持っているかを測定する質問に対して、多重回答形式で回答を求めた。集計の結果(表3)、男子の肯定率が高い項目は、「スポーツ」(56.1%)、「自分の将来」(50.6%)、「趣味」(47.2%)、「部活動・クラブ」(46.7%)であり、女子の肯定率が高い項目は、「自分の将来」(60.5%)、「恋愛・男女交際」(54.9%)、「音楽」(54.9%)、「友達」(53.1%)であった。

性差の検定の結果、表3に示す8項目に有意な差がみられた。男子は女子よりも「スポーツ」「趣味」「部活動・クラブ」に関心を持っており、女子は男子よりも「自分の将来」「恋愛・男女交際」「音楽」「友達」「タレント・芸能界」に関心を持っていた。自分の将来に対しては、男女とも高い関心を持っているが、他の関心領域は男女で異なることが明らかになった。男子はスポーツや部活動、自分の趣味など、自分自身に関わる領域に関心が高く、女子は恋愛や男女交際、友達のことなど、対人関係に対する領域に関心が高い。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男子においては、表4に示す5項目に有意な差がみられた。男子は「自分の将来」「恋愛・男女交際」「音楽」に対して、1年生から2年生にかけて急激に関心が高まる。また、「勉強(進学)」に対しては、1年生から2年生にかけて急激に関心が高まるが、2年生から3年生にかけてその関心が弱まる。「部活動・クラブ」に対しては、2年生から3年生にかけて関心が弱まっている。

女子においては、表4に示す4項目に有意な差がみられた。「恋愛・男女交際」に対しては、1年生から2年生にかけて急激に関心が弱まるものの、2年生から3年生にかけて関心が強まっている。「部活・クラブ」に対しては、男子と同様に、2年生から3年生にかけて関心が弱まり、「勉強(進学)」に対しても、男子と同様に、1年生から2年生にかけて急激に関心が強まり、2年生から3年生にかけて関心は弱まっている。

以上の結果から、男女で「恋愛・男女交際」に対する関心の強さに違いがあることが明らかになった。男子は、1年生では20%弱しか「恋愛・男女交際」に対して関心を持っていないものの、1年生から2年生にかけて急激に関心が高まり、3年生では40%強が「恋愛・男女交際」に関心を持つようになる。女子は、1年生では既に60%強が「恋愛・男女交際」に対して関心を持っているが、1年生から2年生にかけてその関心が急激に弱まる。その後、2年生から3年生にかけて再び「恋愛・男女交際」に対する関心が強まる。

表3 性別にみた中学生の関心領域(単位%)

項目	男子	女子	検定
1. 部活動・クラブのこと	46.7	34.1	**
2. スポーツについて	56.1	20.8	**
3. 勉強(進学)について	37.3	41.5	
4. 趣味について	47.2	36.2	**
5. 恋愛・男女交際について	32.3	54.9	**
6. 音楽について	46.4	54.9	*
7. テレビについて	45.6	49.3	
8. タレント・芸能界のこと	29.0	50.1	**
9. 家族のこと	15.5	21.1	
10. 友達のこと	37.6	53.1	**
11. 自分の将来のこと	50.6	60.5	**
12. その他	6.6	5.0	

男子 N=362, 女子 N=337 * P<.05 ** P<.01 (以下同じ)

表4 性学年別にみた中学生の関心領域(単位%)

項目	性別	1年	2年	3年	検定
1. 部活動・クラブのこと	男子	54.2	50.9	31.1	**
3. 勉強(進学)のこと		31.0	47.4	35.0	*
5. 恋愛・男女交際について		18.3	38.3	43.7	**
6. 音楽について		31.7	56.0	55.3	**
11. 自分の将来のこと		42.3	53.4	58.3	*
1. 部活動・クラブのこと	女子	42.4	37.3	17.0	**
3. 勉強(進学)のこと		38.1	52.9	35.1	*
5. 恋愛・男女交際について		59.0	44.1	60.6	**
7. テレビについて		48.2	41.2	60.6	*

男子 N=361 (1年 N=142, 2年 N=116, 3年 N=103)

女子 N=335 (1年 N=139, 2年 N=102, 3年 N=94)

(2) 恋愛に関する会話

恋愛に関するどのような会話を行っているかを測定する質問に対して、3件法で回答を求めた。以下、「はい」と回答した肯定率に着目して結果を述べる。集計の結果(表5)、男子の肯定率が高い項目は、「友だちとスポーツ選手の話をよくする」(47.6%)、「友だちの恋愛のことが知りたいと思う」(42.6%)、「自分の好きな人のことを話すのは、はずかしい」(38.7%)、「できることなら、自分の好きな人の話はしたくない」(38.0%)であり、

女子の肯定率が高い項目は、「友だちと恋愛の話をよくする」(60.8%)、「友だちの恋愛のことが知りたいと思う」(57.6%)、「友だちと異性タレントの話をよくする」(55.7%)、「友だちと好きな異性の話をするのは楽しい」(54.1%)であった。また、男女とも、30%弱が友達とセックスの話をしていることが明らかになった。

性差の検定の結果、表5に示す7項目に有意な差がみられた。男子は女子よりも「友だちとスポーツ選手の話をよくする」「できることなら、自分の好きな人の話はしたくない」「自分の好きな人のことを話すのははずかしい」の項目で肯定率が高く、女子は男子よりも「友だちと異性タレントの話をよくする」「友だちと恋愛の話をよくする」「友だちの恋愛のことを知りたいと思う」「友だちと好きな異性の話をするのは楽しい」の項目で肯定率が高かった。

以上の結果から、男女とも友達の恋愛に対して興味を持っているが、男子は自分の恋愛や好きな異性の話をするに抵抗を感じており、逆に、女子は恋愛や好きな異性の話をするを楽しんでいることが明らかになった。女子にとって、恋愛は彼女らの会話の中心的話題の一つであると推定される。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男子においては、表6に示す3項目に有意な差がみられた。男子は、1年生から2年生にかけて恋愛に関する話題が友達との会話の中にあがり、それと同時にセックスについて友達と話し合うようになる。一方、女子においては、表6に示す2項目に有意な差がみられた。女子は、1年生から2年生にかけて自分の恋愛の自己開示に対する抵抗が弱まる。

表5 性別にみた友達との恋愛に関する会話(単位%)

項目	N		はい		どちらでもない		いいえ		検定
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
1. 友だちと異性のタレントの話をよくする	360	336	26.9	55.7	27.5	27.4	45.6	17.0	**
2. 友だちとスポーツ選手の話をよくする	355	334	47.6	13.2	27.6	29.6	24.8	57.2	**
3. 友だちと恋愛の話をよくする	358	334	27.9	60.8	31.6	23.7	40.5	15.6	**
4. 友だちとセックスの話をするところがある	352	329	26.1	25.2	27.6	28.9	48.3	45.9	
5. 友だちの恋愛のことが知りたいと思う	357	328	42.6	57.6	28.9	28.7	28.6	13.7	**
6. 友だちと好きな異性の話をするのは楽しい	349	327	24.4	54.1	41.3	32.4	34.4	13.5	**
7. できることなら、自分の好きな人の話はしたくない	355	335	38.0	22.7	45.1	46.9	16.9	30.4	**
8. 自分の好きな人のことを話すのは、はずかしい	362	337	38.7	30.3	45.0	40.4	16.3	29.4	**

表6 性学年別にみた友達との恋愛に関する会話(単位%)

項目	性別	N			はい			どちらでもない			いいえ			検定
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
1. 友だちと異性のタレントの話をよくする	男子	142	114	103	14.8	31.6	38.8	23.9	27.2	32.0	61.3	41.2	29.1	**
3. 友だちと恋愛の話をよくする	男子	140	114	103	17.9	34.2	34.0	28.6	28.1	39.8	53.6	37.1	26.2	**
4. 友だちとセックスの話をするところがある	男子	137	113	101	19.0	30.1	30.7	20.4	27.4	30.7	60.6	42.5	38.6	**
2. 友だちとスポーツ選手の話をよくする	女子	137	102	93	8.8	15.7	16.1	23.4	34.3	33.3	67.9	50.0	50.5	*
8. 自分の好きな人のことを話すのは、はずかしい	女子	139	102	94	38.1	24.5	25.5	32.4	50.0	40.4	29.5	25.5	34.0	*

(3) マスコミからの恋愛情報への態度

マスコミからの恋愛情報をどのように受け入れているかを測定する質問に対して、多重回答形式で回答を求めた。集計の結果(表7), 男子の肯定率が高い項目は、「本やドラマのような恋愛は、現実にはないと思う」(52.8%), 「本やドラマのような恋愛をしてみたい」(30.9%)であり、女子の肯定率が高い項目は、「恋愛もののドラマやマンガをよくみる」(67.7%), 「本やドラマのような恋愛をしてみたい」(53.1%), 「好きな異性タレントがでる番組は必ずチェックする」(47.5%), 「本やドラマのような恋愛は、現実にはないと思う」(46.0%)であった。男女とも、本やドラマのような恋愛は現実の恋愛とは異なると把握しながらも、本やドラマのようなロマンチックな恋愛に憧れている。

性差の検定の結果、表7に示す5項目で、いずれも男子よりも女子の肯定率が有意に高いことが明らかになった。これらの結果から、男子に比べて、女子はマスコミからの恋愛情報を積極的に取り入れ、ロマンチックな恋愛への憧れが強く、そのような恋愛の主人公に対して同一化しやすいことが明らかになった。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男女とも、表8に示す1項目に有意な差が認められた。男子は、1年生から2年生にかけて異性タレントへの関心が高まる。女子は、1年生から2年生にかけて本やドラマのようなロマンチックな恋愛に対する憧れに急激な減少がみられるが、それでも、2年生の40%強はそのような恋愛に憧れていることが明らかになった。

表7 性別にみたマスコミからの恋愛情報への態度(単位%)

項 目	男子	女子	検定
1. 本やドラマのような恋愛をしてみたい	30.9	53.1	**
2. 雑誌の恋愛の話は、自分たちの参考になる	11.9	28.2	**
3. 本やドラマのような恋愛は現実にはないと思う	52.8	46.0	**
4. 本やドラマで恋愛している主人公をみると、同じような気持ちになる	14.6	35.9	**
5. 恋愛もののドラマ・マンガをよくみる	19.9	67.7	**
6. 好きな異性タレントがでる番組は必ずチェックする	16.6	47.5	**
7. あてはまるものがない	21.8	4.2	**

男子 N=362, 女子 N=337

表8 性学年別にみたマスコミからの恋愛情報への態度(単位%)

項 目	性別	N			1年	2年	3年	検定
		1年	2年	3年				
6. 好きな異性タレントがでる番組は必ずチェックする	男子	142	116	103	7.0	22.4	23.3	**
1. 本やドラマのような恋愛をしてみたい	女子	139	102	94	61.9	42.2	51.1	**

(4) 恋愛と性・結婚との結びつき

恋愛とキスやセックス、結婚との結びつきをどのように考えているかを測定する質問に対して、3件法で回答を求めた。以下、「はい」と回答した肯定率に着目して結果を述べる。集計の結果(表9)、男子の肯定率が高い項目は、「好きな人とならキスをしてもいいと思う」(65.4%)、「中学生のカップルは大人になって結婚することは少ないと思う」(63.3%)、「中学生の恋愛は、結婚と結びつかないと思う」(47.4%)、「好きな人ができたら、その人といっしょに住みたいと思う」(44.6%)であり、女子の肯定率が高い項目は、「好きな人とならキスしてもいいと思う」(69.0%)、「中学生のカップルは大人になって結婚することは少ないと思う」(59.6%)、「好きな異性と結婚したいと思う」(45.1%)、「中学生の恋愛は、結婚と結びつかないと思う」(43.3%)であった。また、男女とも、40%前後が好きな人とならセックスをしてもいいと思っていた。

以上の結果から、男女とも、中学生の恋愛が結婚と結びつくことは少ないと認識しながらも、自分自身が好きな異性と性の行動に関しては許容的であり、好きな異性と結婚願望も強いことが明らかになった。

性差の検定の結果、表9に示す2項目で、いずれも男子よりも女子の肯定率が有意に高いことが認められた。男子に比べて、女子は恋愛に対して積極的であるが、キス以上の性行動には恐怖を感じている。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男子においては、表10に示す3項目に有意な差がみられた。男子は、1年生で既に60%弱が好きな人とならキスをしてよいと考えており、1年生の30%強、2年生の40%、3年生の50%強が、好きな人とならセックスをしていいと考えている。男子は、学年が上がるにつれて、性行動への許容度が高くなることが明らかになった。また、「キス以上の関係を持つのは怖い」といった性行動に対する否定的な意識は、2年生から3年生にかけて急激に弱まり、3年生では10%以下になっていた。女子においては、表10に示す4項目に有意な差が認められた。女子におけるキス以上の性行動に対する否定的な意識は、1年生から2年生にかけて弱まっていた。その後、2年生から3年生にかけてセックスに対する許容度が高まり、3年生の50%強が好きな人とならセックスをしていいと考えていた。また、女子の結婚願望や同棲希望は1年生から2年生にかけて弱まるが、2年生から3年生にかけて再び高くなることが明らかになった。

表9 性別にみた恋愛と性・結婚との結びつき(単位%)

項目	N		はい		どちらでもない		いいえ		検定
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
1. 誰かに恋をしていないと、つまらないと思う	362	337	35.1	53.7	35.1	29.4	29.8	16.9	**
2. 好きな人とならキスしてもいいと思う	361	335	65.4	69.0	25.8	26.3	8.9	4.8	
3. 好きな人とならセックスしてもいいと思う	361	335	40.7	34.9	41.6	41.8	17.7	23.3	
4. 好きな人とキス以上の関係をもつのは怖い	358	334	19.0	26.6	45.8	49.1	35.2	24.3	**
5. 好きな異性と結婚したいと思う	355	328	44.2	45.1	42.0	43.3	13.8	11.6	
6. 好きな人ができたら、その人といっしょに住みたいと思う	354	332	44.6	39.2	40.4	47.9	15.0	13.0	
7. 中学生のカップルは大人になって結婚することは少ないと思う	362	337	63.3	59.6	30.1	34.1	6.6	6.2	
8. 中学生の恋愛は、結婚とは結びつかないと思う	361	337	47.4	43.3	39.9	42.7	12.7	13.9	

表10 性学年別にみた恋愛と性・結婚との結びつき(単位%)

項 目	性別	N			はい			どちらでもない			いいえ			検定
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
2. 好きな人とならキスをしてもいいと思う	男子	141	116	103	58.9	63.8	75.7	29.1	24.1	23.3	12.1	12.1	1.0	**
3. 好きな人とならセックスをしてもいいと思う		142	115	103	31.0	40.0	54.4	45.8	33.3	39.8	23.2	21.7	5.8	**
4. 好きな人とキス以上の関係をもつのはこわい		140	116	101	22.1	24.1	8.9	45.7	44.8	47.5	32.1	31.0	43.6	*
3. 好きな人とならセックスをしてもいいと思う	女子	139	101	93	26.6	30.7	52.7	43.9	41.6	37.6	29.5	27.7	9.7	**
4. 好きな人とキス以上の関係をもつのはこわい		139	101	92	33.1	20.8	21.7	42.4	62.4	45.7	24.5	16.8	32.6	**
5. 好きな異性と結婚したいと思う		136	99	91	45.6	37.4	52.7	41.9	55.6	31.9	12.5	7.1	15.4	*
6. 好きな人ができたら、その人といっしょに住みたいと思う		137	101	92	43.1	27.7	46.7	41.6	60.4	42.4	15.3	11.9	10.9	*

(5) 恋愛や恋愛行動への積極性

恋愛や恋愛行動に対する積極性を測定する質問に対して、多重回答形式と3件法で回答を求めた。以下、「はい」と回答した肯定率に着目して結果を述べる。集計の結果(表11)、男子の肯定率が高い項目は、「自分の好きな異性にあこがれている同性が、いるかどうか気になる」(45.6%)、「好きな異性はいっつい見つめてしまう」(40.9%)、「友だちと同じ人を好きになっても、自分のものにしようと思う」(39.7%)であり、女子の肯定率が高い項目は、「自分の好きな異性にあこがれている同性が、いるかどうか気になる」(58.2%)、「好きな異性はいっつい見つめてしまう」(57.4%)、「好きな異性の誕生日やバレンタインデーにプレゼントしたことがある」(54.9%)であった。男女とも共通して、自分の好きな異性に憧れている同性の存在を意識していた。

性差の検定の結果、表11に示す7項目に有意な差がみられた。女子よりも男子の肯定率が高い項目は、「友だちと同じ人を好きになっても、自分のものにしようと思う」であり、男子よりも女子の肯定率が高い項目は、「異性タレントやスポーツ選手の写真や切り抜きを持ち歩いている」「好きな異性に自分から告白したことがある」「好きな異性の誕生日やバレンタインデーにプレゼントしたことがある」「好きな異性はいっつい見つめてしまう」「好きな異性の情報は積極的に集める方だ」「自分の好きな異性にあこがれている同性が、いるかどうか気になる」であった。

以上の結果から、男子に比べて、女子は好きな異性を見つめたり、その異性の情報を集めたり、その異性にプレゼントをしたり、告白したりというような恋愛行動を積極的に行っていることが明らかになった。また、女子は、積極的な恋愛行動をとりながらも、同性の友達との関係を重視しており、同性の友達との関係を悪くしてまで、自分の恋愛を貫こうとは考えていないと推定される。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男子においては、表12に示す2項目に有意な差がみられた。この結果から、男子は、2年生から3年生にかけて、自分から恋愛行動をとるようになると推定される。

女子においては、表12に示す2項目に有意な差がみられた。女子は、1年生からプレゼントをしたり、告白したりと、積極的に恋愛行動をとっているが、学年が上がるにつれてその傾向はますます強くなることが明らかになった。

表11 性別にみた恋愛や恋愛行動への積極性(単位%)

項目	N		はい		検定
	男子	女子	男子	女子	
1. 異性のタレントやスポーツ選手の写真や切り抜きを持ち歩いている	355	333	10.7	41.1	**
2. 好きな異性に自分から告白したことがある	362	336	22.9	38.4	**
3. 好きな異性には、自分が好きなことがわかるように、せったことがある	362	337	30.4	36.8	
4. 好きな異性の誕生日やホワイトデー(バレンタインデー)にプレゼントしたことがある	362	337	30.4	54.9	**

項目	N		はい		どちらでもない		いいえ		検定
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
5. 好きな異性にはよく話しかける	362	337	15.2	19.6	44.8	40.7	40.1	39.8	
6. 好きな異性はつつい見つめてしまう	362	336	40.9	57.4	33.4	26.2	25.7	16.4	**
7. 好きな異性の前では男らしく(女らしく)ふるまってしまう	360	336	15.3	14.6	50.0	47.6	34.7	37.8	
8. 好きな異性の情報は積極的に集める方だ	358	335	15.4	28.1	31.3	40.0	53.4	31.9	**
9. 自分よりかっこいい(かわいい)同性が好きな異性は、好きにならない	360	337	8.9	10.7	46.4	43.3	44.7	46.0	
10. 友だちと同じ人を好きになったら、その人のことはあきらめる。	362	336	8.3	13.4	37.3	34.5	54.4	52.1	
11. 自分の好きな異性にあこがれている同性が、いるかどうか気になる	362	335	45.6	53.2	29.0	23.0	25.4	18.8	**
12. 友だちと同じ人を好きになっても、自分のものにしようと思う	360	337	39.7	27.9	43.9	45.4	16.4	26.7	**

注) 1. ~4. はMA, 5. ~12. は3件法

表12 性学年別にみた恋愛や恋愛行動への積極性(単位%)

項目	性別	N			はい			検定
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	
2. 好きな異性には自分から告白したことがある	男子	142	116	103	16.9	20.7	33.0	**
3. 好きな異性には、自分が好きなことがわかるように、せったことがある		142	116	103	27.5	24.1	41.7	*
		142	116	103				
2. 好きな異性には自分から告白したことがある	女子	139	101	94	30.9	40.6	46.8	*
4. 好きな異性の誕生日やホワイトデー(バレンタインデー)にプレゼントしたことがある		139	102	94	48.2	52.2	67.0	*

(6) 恋愛対象の遍歴性

恋愛対象の遍歴性を測定する質問に対して、多重回答形式と3件法で回答を求めた。集計の結果(表13)、男子の肯定率が高かった項目は、「たくさん恋をしたいと思う」(21.0%)、「ひとりの異性に好かれるより、多くの異性に好かれたい」(20.9%)、「同じくらい好きな異性が、何人かいる」(19.4%)であり、女子の肯定率が高かった項目は「たくさん恋をしたいと思う」(41.4%)、「いろんな異性にあこがれを感じる」(28.3%)、「ひとりの異性に好かれるより、多くの異性に好かれたい」(20.7%)であった。

性差の検定の結果、表13に示す3項目で、いずれも男子よりも女子の肯定率が有意に高かった。以上の結果から、男女とも、たくさん恋をしたい、多くの異性から好かれたいと

考えているが、男子よりも女子にそれらの願望が強いことが明らかになった。また、男子に比べて、女子は好きな異性のタイプが定まらず、いろんな異性に憧れを感じていた。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男女とも共通して、表14に示す1項目に有意な差がみられた。男子は、1年生から2年生にかけて、女子は、2年生から3年生にかけて、いろいろな異性に憧れを感じるようになる。この結果から、いろいろな異性に憧れを感じる始める時期は、男女で異なることが明らかになった。また、異性に対する憧れの強さも、男女で異なり、異性に憧れを感じている男子は1年生で8%弱、3年生でも20%弱のみであった。女子は、1年生で、既に20%強が異性に憧れを感じており、3年生では40%強が異性に憧れを感じていた。

表13 性別にみた恋愛対象の遍歴性(単位%)

項 目	N		はい		検定			
	男子	女子	男子	女子				
1. 同じくらい好きな異性が、何人かいる	361	337	19.4	17.8				

項 目	N		はい		どちらでもない		いいえ		検定
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
2. たくさん恋をしたいと思う	362	336	21.0	41.4	37.3	37.2	41.7	21.4	**
3. ひとりの異性に好かれるより、多くの異性に好かれたい	358	334	20.9	20.7	37.4	44.0	41.6	35.3	**
4. 次から次へと好きな異性が変わりやすい	360	335	8.9	13.7	35.8	34.9	55.3	51.3	
5. 好きな異性のタイプが変わりやすい	359	335	6.4	13.1	34.8	31.9	58.8	54.9	*
6. いろんな異性にあこがれを感じる	353	332	13.9	28.3	30.6	33.7	55.8	38.0	**

注) 1. はMA, 2. ~6. は3件法

表14 性学年別にみた恋愛対象の遍歴性(単位%)

項 目	性別	N			はい			どちらでもない			いいえ			検定
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
6. いろんな異性にあこがれを感じる	男子	139	112	110	7.9	15.2	19.8	33.1	25.0	33.7	59.0	59.3	46.5	*
6. いろんな異性にあこがれを感じる	女子	138	101	91	23.9	20.8	42.9	34.8	40.6	25.3	41.3	38.6	31.9	**

(7) 憧れている異性の有無とその立場

憧れている異性の有無とその立場を測定する質問に対して、多重回答形式で回答を求めた。集計の結果(表15)、全体の78.6%が、憧れている異性が「いる」と回答していた。性差の検定の結果(表15)、1%水準で有意な差が認められ、男子に比べて、女子の方が憧れている異性が多く「いる」ことが明らかになった。

男子が憧れている異性の立場として多く挙げた項目は、「同学年の異性」(61.6%)、「タレントやミュージシャン」(25.5%)であり、女子が憧れている異性の立場として多く挙げた項目は「同学年の異性」(43.0%)、「タレントやミュージシャン」(28.9%)、「先輩」(18.8%)であった。性差の検定の結果(表16)、1%水準で有意な差がみられた。女子に比べて、男子は「同学年の異性」への憧れが強く、男子に比べて、女子は「先輩」への憧

れが強い。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、男子においてのみ5%水準で有意な差が認められた(表17)。男子は、学年が上がるにつれて「タレントやミュージシャン」への憧れが強くなり、3年生では40%弱が「タレントやミュージシャン」に憧れている。また、「同学年の異性」への憧れは学年が上がるほど弱まるが、3年生になっても、50%弱は「同学年の異性」に憧れていることが明らかになった。

表15 性別にみた憧れている異性の有無(単位%)

	N	いる	いない	複数	検定
男子	351	72.6	26.5	0.9	**
女子	331	84.9	14.5	0.6	

表16 性別にみた憧れている異性の立場(単位%)

	N	タレントや ミュージシャン	スポーツ 選手	先輩	同学年 の異性	後輩	その他	あてはまる 人はいない	検定
男子	255	25.5	3.5	4.3	61.6	2.0	2.7	0.4	**
女子	277	28.9	4.3	18.8	43.0	0.4	4.7	0.0	

注) 憧れている人が「いる」または「複数」と回答した該当者の比率

表17 男子学年別にみた憧れている異性の立場(単位%)

	N	タレントや ミュージシャン	スポーツ 選手	先輩	同学年 の異性	後輩	その他	あてはまる 人はいない	検定
1年生	97	17.5	4.1	6.2	71.6	0.0	1.0	0.0	*
2年生	84	25.0	2.4	4.8	61.9	3.6	1.2	1.2	
3年生	74	36.5	4.1	1.4	48.6	2.7	6.8	0.0	

注) 憧れている人が「いる」または「複数」と回答した該当者の比率

2. 中学生の好きな異性に対する気持ちやその異性との行動

中学生の恋愛に関わる意識や行動と同様に、中学生の好きな異性に対する気持ちやその異性との行動について、性差、及び性別毎に学年差の検定を行い、性差、学年差について検討した。

(1) 好きな異性の有無とその関係

特定の異性を想定するために「好きな異性、もしくは家族以外で最も親しい異性」の有無とその異性との関係を測定する質問に対して、多重回答形式で回答を求めた。集計の結果(表18)、無記入を除く665名のうち79.4%が、好きな異性が「いる」と回答していた。その内訳は「恋人」4.5%、「ボーイフレンド・ガールフレンド」5.3%、「片思い」40.8%、「親友」1.5%、「友達」22.3%、「その他」5.0%、「あてはまる人はいない」20.8%であった。性差、及び性別毎の学年差の検定を行ったが、有意な差は認められなかった。

表18 性別にみた好きな異性との関係

	N	恋人	ボーイフレンド ガールフレンド	片思い	親友	友だち	その他	あてはまる 人はいない	検定
男子	345	4.3	5.8	36.2	0.9	25.8	3.2	23.8	
女子	320	4.7	4.7	45.6	2.2	18.4	6.9	17.5	

注) 好きな異性の立場を回答した該当者の比率

(2) 好きな異性への恋愛感情

好きな異性への恋愛感情を測定する質問に対して、多重回答形式で回答を求めた。集計の結果(表19), 男子の肯定率(該当者内の肯定率, 以下同様)が高い項目は、「その人に会うとうれしい」(59.3%), 「その人と会えなくなったら, とてもかなしい」(49.5%), 「その人をつい目で追ってしまう」(40.7%), 「気がつくとその人のことを考えている」(36.7%), 「その人のためなら, なんでもしてあげたい」(36.4%)であり, 女子の肯定率が高い項目は、「その人に会うとうれしい」(78.4%), 「その人と会えなくなったら, とてもかなしい」(66.2%), 「その人をつい目で追ってしまう」(59.4%), 「気がつくとその人のことを考えている」(51.1%), 「その人と話すときドキドキする」(46.8%)であった。また「二人にしかわからない秘密がたくさんある」「その人と強く結びついていると感じる」の肯定率は, 男女とも, 10%前後と低かった。

これらの結果から, 男女とも, 好きな異性に対してときめきや憑執的な感情は感じているが, 相手との強い結びつきや他を寄せつけない内閉的な感情は感じていないと推定される。そして, 好きな異性に対する激しい恋愛感情とその異性との深まりのない関係性とのギャップは, 男子よりも女子に大きいことが明らかになった。

性差の検定の結果, 表19に示す11項目に有意な差がみられた。女子よりも男子の肯定率が高い項目は、「同性の友達といるよりも, その人といる方が心がやすらぐ」「その人と一緒に住みたいと思う」であり, 男子よりも女子の肯定率が高い項目は、「その人に会うとうれしい」「その人をつい目で追ってしまう」「その人と話すときドキドキする」「友達にその人のことをよく話す」「気がつくとその人のことを考えている」「その人には自分のことだけを考えてほしい」「その人のことを考えて, ポーっとすることがある」「その人に会えなくなったら, とてもかなしい」「二人きりでいるより大勢でいる方が楽しい」であった。

以上の結果から, 男子は, 好きな異性に対して安らぎを感じ, 共に居ることを望んでいるが, 女子は, 好きな異性に対してときめきや憑執的な感情を抱きながらも, 二人きりになることに抵抗を感じていた。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったが, 全ての項目において有意な差は認められなかった。

表19 性別にみた好きな異性への恋愛感情 (単位%)

項 目	男子	女子	検定
1. その人に会うとうれしい	59.3	78.4	**
2. その人をつい目で追ってしまう	40.7	59.4	**
3. その人と話すときドキドキする	33.8	46.8	**
4. その人のためなら、なんでもしてあげたい	36.4	31.7	
5. 友達にその人のことをよく話す	16.7	41.0	**
6. 二人きりでいるより大勢でいた方が楽しい	22.5	30.6	*
7. 気がつくとその人のことを考えている	36.7	51.1	**
8. その人には自分のことだけを考えてほしい	25.1	36.7	**
9. その人のことを考えて、ポーっとすることがある	28.0	45.3	**
10. その人のためなら、どんなことでもガマンできる	23.3	18.0	
11. 同性の友達というよりも、その人という方が心がやすらぐ	25.1	16.5	*
12. その人さえいれば、他に誰もいない	13.5	11.5	
13. その人に会えなくなったら、とてもかなしい	49.5	66.2	**
14. 二人にしかわからない秘密がたくさんある	7.3	11.9	
15. その人と強く結びついていると感じている	12.0	7.9	
16. その人と結婚したいと思う	29.8	25.2	
17. その人と一緒に住みたいと思う	34.2	24.5	*
18. あてはまるものがひとつもない	14.2	5.4	**

男子 N=275, 女子 N=278

注) 好きな異性の立場を「あてはまる人はいない」と回答した者を除いた該当者の比率

(3) 好きな異性との恋愛行動

好きな異性との恋愛行動の内容を測定する質問に対して、多重回答形式で回答を求めた。集計の結果(表20)、男子の肯定率が高い項目は、「学校の行き帰りに会う」(32.7%)、「プレゼントをした(プレゼントされた)」(27.5%)、「相談事を聞いてあげる(聞いてもらう)」(25.0%)、「好きな気持ちを告白した」(17.5%)であり、女子の肯定率の高い項目は、「プレゼントをした(プレゼントされた)」(35.0%)、「学校の行き帰りに会う」(33.8%)、「相談事を聞いてあげる(聞いてもらう)」(26.5%)、「好きな気持ちを告白した」(24.5%)であった。以上の結果から、中学生の恋愛行動としては、男女ともほぼ共通して、学校の行き帰りに会ったり、相談事をしたり、されたり、プレゼントをしたり、されたりといった行動がとられていた。

性差の検定の結果、表20に示す2項目で、いずれも男子よりも女子の肯定率が高かった。男子に比べて、女子は自分の気持ちを積極的に告白していることが明らかになった。

性別に学年差の χ^2 検定を行ったところ、女子においてのみ、表21に示す5項目に有意な差が認められた。女子は1年生から2年生にかけて、好きな異性に相談をしたり、プレゼントをしたり(されたり)、告白されたりといった恋愛行動を経験するようになる。特に、2年生の45%強は、好きな異性にプレゼントしたり、されたりした経験を持っていた。また、キスをしたり、抱き合ったりといった性行動の経験率は、2年生から3年生にかけて急激に高くなるが、その経験率は3年生で14%弱にとどまっていた。

表20 性別にみた好きな異性への恋愛行動(単位%)

項目	N		男子	女子	検定
	男子	女子			
1. 相談事を聞いてあげる(聞いてもらう)	272	275	25.0	26.5	
2. なやみをうちあげた(うちあげられた)	270	275	17.0	18.2	
3. 特別な用がないのに電話をする	270	275	9.6	14.2	
4. 学校の行き帰りに会う	266	275	32.7	33.8	
5. 手をつないだり, 腕を組んだりした	266	273	10.5	9.9	
6. グループでハイキングや遊園地に行った	270	274	18.9	17.2	
7. 二人でデートした	265	274	6.4	7.3	
8. プレゼントをした(プレゼントされた)	269	274	27.5	35.0	
9. キスをしたり, だきあったりした	264	274	4.5	6.6	
10. 好きな気持ちを告白した	269	274	17.5	24.5	*
11. 好きな気持ちを告白された	267	273	13.5	13.2	
12. ボーイフレンド(ガールフレンド)として友達に紹介された	261	272	1.1	4.4	*
13. ガールフレンド(ボーイフレンド)として友達に紹介した	262	272	2.7	3.7	
14. 親に紹介した(紹介された)	261	272	3.1	5.1	
15. むねや体にさわったりさわられたりした	265	272	10.6	8.1	
16. 自分たちの結婚について話し合った	262	271	3.1	1.1	
17. 恋人として友達に紹介した(紹介された)	262	270	4.6	5.9	

注) 好きな異性の立場を「あてはまる人はいない」と回答した者を除いた該当者の比率

表21 女子学年別にみた好きな異性への恋愛行動(単位%)

項目	N			1年	2年	3年	検定
	1年	2年	3年				
1. 相談事を聞いてあげる(聞いてもらう)	118	76	79	19.5	35.5	26.6	*
2. なやみをうちあげた(うちあげられた)	118	76	79	11.0	21.1	24.1	*
8. プレゼントをした(プレゼントされた)	116	77	72	26.7	45.5	35.4	*
9. キスをしたり, だきあったりした	117	76	79	3.4	3.9	13.9	**
11. 好きな気持ちを告白された	116	76	79	6.0	17.1	19.0	*

注) 好きな異性の立場を「あてはまる人はいない」と回答した者を除いた該当者の比率

<考察>

中学生の恋愛感情や恋愛行動について性差, 学年差の検討を行った後, 第1調査の結果を踏まえながら, 中学生の恋愛の実態と教師の認識との比較を行う。

1. 性差・学年差

(1) 性差

中学生が関心を持つ領域をみたところ, 男子は自分自身に関わる領域に関心が高く, 女子は対人関係に対する領域に関心が高かった。男女とも, 「恋愛・男女交際」に対して関心を持っていたが, 女子の方がより関心が強かった。友達との会話において, 男子は自分の恋愛の話をするに抵抗を感じていたが, 女子は自分の恋愛や好きな異性の話をする

ことを楽しんでいた。

男女とも、好きな異性に対してときめきや憑執的な感情を抱いていたが、男子は異性に安らぎを感じ、共にいることを望んでおり、女子は男子と反対に、二人きりになることに抵抗を感じていた。

さらに、女子に特徴的な傾向として、マスコミからの恋愛情報を積極的に取り入れていること、ロマンチックな恋愛に強く憧れ、そのような恋愛の主人公に対して同一化しやすいことが挙げられる。行動面においても、好きな異性を見つめたり、その異性の情報を集めたり、プレゼントをしたり、告白したりと、積極的に恋愛行動を行っていた。

以上の結果から、男子に比べて女子は、恋愛に対して積極的であると結論される。女子が恋愛に対して積極的である理由として、次の4点が考えられる。

第1に、心身の発達の早さの性差が挙げられる。中学生の時期は、男子よりも女子の方が心身とも発達しており、異性に関する関心も女子の発達の方が早いといわれている（日本性教育協会、1994）。恋愛への積極性は、性に対する関心の強さと対応しているものと推定される。第2に、恋愛対象との年齢差による性差が挙げられる。女子の恋愛対象は、年上であることが多く、年上の相手からの影響を受けて、女子の恋愛に対する考え方や行動は、同年代の男子に比べて進んでいるものと考えられる。第3に、対人関係の発達時期による性差が挙げられる。P. プロス（1962）の対人関係パターンの発達の視点によると、青年は同性集団との親密な交流を経験した後、異性との交流を経験するようになる。女子は小学生の時期に、既に同性との親密な交流を経験しており（松井、1996）、P. プロスの対人関係パターンの発達のプロセスを考慮すると、中学校時代には異性との交流へと移行していると考えられる。つまり、女子の対人関係の発達は、男子よりも先行しており、この発達の差が、女子の恋愛への積極性として現れていると解釈される。第4に、第2調査の調査時期がバレンタインデーの直後であり、そのために好きな異性に対する恋愛行動（告白・プレゼント）をとった女子の比率が上昇した可能性もあると考えられる。

(2) 学年差

①男子の学年差

男子は1年生から2年生にかけて、「恋愛・男女交際」への関心が強くなり、友達と恋愛やセックスの話をするようになりながら、いろいろな異性に対する憧れが強くなっている。2年生から3年生にかけては、性行動に対する否定的な意識が弱まり、自分から具体的な恋愛行動をとるようになる。また、学年が上がるにつれて、「タレントやミュージシャン」への憧れが強くなり、「同学年の異性」に対する憧れが弱まっていた。

以上の結果から、男子は中学1年生から2年生にかけて恋愛に対する関心が芽生え、2年生から3年生にかけて、意識面における変化が恋愛や性に関わる行動面に影響を及ぼし、具体的な恋愛行動をとるようになるかと推察される。

②女子の学年差

女子は2年生になると、「恋愛・男女交際」に対する関心やロマンチックな恋愛への憧

れが弱まり、それらと同様に、好きな異性との結婚願望や同棲願望も、1年生に比べて弱くなることが明らかになった。同時に、性行動に対する否定的な意識にも弱まりがみられ、自分の恋愛に対する自己開示への抵抗も弱くなっていく。3年生になると、いったん、弱まっていた「恋愛・男女交際」に対する関心や好きな異性との結婚願望、同棲願望が再び高まり、いろいろな異性に憧れを感じるようになる。また、セックスに対する許容度も高まり、性行動の経験率もかなり上昇する。

以上の結果から、女子は2年生になると恋愛に対する意識にかなり大きな変化が生じ、恋愛に対して、独特の心理状態になると推定される。女子がこうした変化を示す理由として、親や社会から期待される性役割に対する反発(松井, 1996)や、第2調査の調査時期が、2年生にとって高校受験を左右する統一テストの前後であった影響が推測される。しかし、これらは推測の域を出ておらず、2年生女子の恋愛に対する独特の心理状態の原因は、本調査では明らかにされなかった。今後の研究では、女子の恋愛に対する心理状態の変化に関して詳細な検証を行うと同時に、このような変化を現場の教師はどのように理解しているかについても明らかにしていきたい。

2. 中学生の恋愛の実態と教師の認識との比較

(1) 中学生の恋愛行動

①年上への憧れ

桂(1965)は同年代の異性に向けられない愛情を代償する形で、年上の異性(場合によっては同性)に対して強く憧れることを「代償的愛情」と呼んでいる。

本研究の第2調査において、中学生全体の8割弱が憧れている異性が「いる」と回答し、男子よりも女子の方に異性に憧れている者が多かった。その中でも男子の3割強、女子の5割強は「タレントやミュージシャン」「スポーツ選手」「先輩」に憧れていると回答していた。本結果から、「代償的愛情」は、男子よりも女子の方がよりあてはまることが明らかになった。

②恋愛と性の結びつき

第1調査の結果、中学校教師は、中学生の恋愛は相談をしたりするつきあいとどまっており、性行動へと進展するつきあいではないと認識していた。

第2調査の結果、中学生の好きな異性との恋愛行動は、学校の行き帰りに会ったり、お互いに相談事をしたり、プレゼントを送ったりする程度のつきあいであった。また、手や腕をつないだ経験のある者は、全体の10%前後、キスや抱擁の経験がある者は、同じく5%前後であり、性行動の経験がある者は、全体からみれば極くわずかであった。これらの実態から、中学生の恋愛行動は、性行動との結びつきは少ないと結論されよう。

しかし、中学生の70%弱は「好きな人とならキスをしてもいい」と考えており、同じく40%前後は「好きな人とならセックスをしてもいい」と考えていた。現実の性行動には結びついていないが、中学生は自分自身の性的な欲求に対してかなり許容的であった。

中学生は、本やドラマのような恋愛は現実の恋愛とは異なると把握しながらも、ロマン

チックな恋愛に対する憧れは強かった。また、男女とも、中学生の恋愛が結婚と結びつくことは少ないと認識しているが、自分が好きな異性との性行動には許容的であり、その異性との結婚願望も強かった。

以上の結果から、中学生は、本やドラマのようなロマンチックな恋愛は現実にはないことや、自分たちの恋愛が性行動や結婚と結びつきにくいことを世間の常識として把握しているが、個人的には、ロマンチックな恋愛への憧れが強く、好きな異性との結婚願望や好きな異性への性的欲求も膨らんでいた。中学生として常識的な恋愛についての認識と自分自身の好きな異性に対する願望や欲求との間には乖離がみられた。

好きな異性との性行動に対する許容度が高いにもかかわらず、実際に性行動を経験している中学生は少なかった。中学生の性行動の経験率の低さは、中学生の恋愛に対する世間の常識が現実的な制限として、中学生の性行動に影響を及ぼしているためと考えられる。すなわち、中学生の好きな異性との性行動に対する許容度の高さと、実際の性行動の経験率の低さととの較差は、中学生の異性に対する願望や欲求の強さと、中学生としての恋愛に対する常識が彼らに与える影響力の大きさとの差を、具体的に示していると推定される。

好きな異性に対する欲求や願望と、中学生として常識的な恋愛についての認識との乖離を、中学生自身はどのように処理しているのだろうか。それらの処理の仕方については、本研究では明らかになっておらず、今後の研究課題としたい。

好きな対象への願望や欲求と、中学生として常識的な恋愛の形との間にはギャップがあることは、中学生の恋愛の特徴の一つであると結論される。

第1調査の結果と照合してみると、教師は、中学生の実際の恋愛行動についてはかなり把握していた。しかし、教師が認識している範囲は、中学生として常識的な範囲の行動にすぎない。むしろ、重要なことは、中学生の中に潜んでいる好きな異性への性的な欲求や結婚願望を把握しきれていない点にあるのではないだろうか。

③対象の遍歴性・交際の持続性

第1調査において、中学校教師は、中学生に対して、結婚に到る持続的な関係を持つことを意識しておらず、異性との一時的な関係を自分たちの恋愛パターンとして楽しんでいると認識していた。

第2調査において、中学生は「いろんな異性に憧れを感じている」男子が1割強、女子が3割弱おり、次から次へと好きな異性や、好きな異性のタイプが変わりやすい者は、男子が1割弱、女子が1割強いたにすぎなかった。桂(1965)は、次から次へと好きな対象や憧れる対象が変わりやすい時期を「愛情の試行的遍歴期」と呼んでいる。本研究の結果から、「愛情の試行的遍歴期」は一部の中学生にのみ存在し、男子よりも女子により多く存在することが明らかにされた。

中学生の4割前後が好きな異性との同棲願望を持っており、同じく4割強が結婚願望を持っていた。中学生は自分たちの恋愛の将来的な展望を意識しており、交際が持続することを望んでいた。しかし、中学生は自分たちの一般的な恋愛の形として、中学生の恋愛が結婚と結びつくことは少ないと認識していた。つまり、中学生は、現実的には、中学生の

恋愛が結婚へと結びつくことは少ないと認識しているが、その一方で、好きな異性と一緒に住みたい、結婚したいと望んでいた。このように、交際の持続性の面からみても、中学生としての現実的な恋愛についての認識と中学生自身の願望との間にはギャップがあると推察される。

中学生自身は、その時々で好きな異性ととの恋愛の将来的な展望を意識し、二人の交際が持続することを望んでいるが、対象の遍歴性がみられる時期であることや、中学生の3割強が「たくさん恋をしたい」と考えていることを考慮すると、現実的には一人の異性ととの継続的な交際はできていないと推定される。

教師は、中学生の恋愛に関して、持続性を持っていないという現状を認識していた。しかし、中学生の好きな異性と一緒に住みたい、結婚したいという、交際の持続性に対する願望までは十分に認識していないと結論づけられる。

(2) 中学生の恋愛形態－片思い－

①好きな異性との関係性とその異性への態度

第2調査において、中学生の8割弱が好きな異性が「いる」と回答していた。好きな異性との関係性をみると、「恋人」または「ボーイフレンド・ガールフレンド」と回答した者は、好きな異性が「いる」と回答した者のうち1割強（全体の1割弱）、「片思い」と回答した者は5割強（全体の4割）、「親友」「友達」「その他」と回答した者は4割弱（全体の3割弱）であった。

NHK世論調査部の報告（1984）によると、「好きな異性がいる」中学生は3年生で4割強であり、「異性と1対1でつきあっているボーイフレンド・ガールフレンドがいる」中学生は全体の1割弱であった。同報告と本研究の結果を対照すると、「好きな異性がいる」中学生の比率は、10年以上前と比べると、かなり増加しているが、「異性と1対1でつきあっている」中学生の比率はとどまったまま、変化していないと結論される。

次に、中学生の好きな異性に対する態度をみると、遠くからその異性を見つめている者は5割弱いるが、自分からその異性に積極的に話かけている者は2割弱と少ない。中学生の恋愛形態は、直接、好きな異性と話をしたり、接したりというよりも、その異性と距離をとって、遠くから眺めているといった「片思い」の形態が多いと結論される。桂（1965）は、積極的に異性に対する愛情を相手に伝えるようとする具体的な行動がみられない恋愛を「平行的恋愛」と呼んでいるが、中学生の恋愛形態はまさしく「平行的恋愛」といえる。

好きな異性との関係性の側面からみても、好きな異性に対する態度の側面からみても、中学生の恋愛は片思いが中心であった。

②好きな異性への恋愛感情

第1調査において、中学校教師は、中学生の恋愛感情は恋に恋する気持ちや「友達」感覚であって、将来的な展望や結婚を意識した恋愛感情ではないと認識していた。

第2調査の結果、中学生は、男女とも、好きな異性に対してときめきや憑執的な感情を

感じているが、相手との強い結びつきや他を寄せつけない関係性から生じる内閉的な感情を感じている者は少なかった。

中学生の好きな異性との関係性や好きな異性に対する態度から、中学生の恋愛形態は、「片思い」が多いことが明らかになった。このような中学生の恋愛形態からも、彼らの恋愛感情は相手との強い結びつきや排他的な関係性から生じている可能性は少ない。

しかし、中学生の恋愛感情の中身を見ると、好きな異性に対して憑執的な感情を感じているという意味で、中学生の恋愛感情は「友達」感覚というより、より成人の恋愛感情に近い、異性愛的な感情であると推定される。

以上の考察から、中学生の恋愛感情は、恋愛感情を向ける相手との関係性の面においては、成人の関係性とは異なっており、その意味で成人の恋愛感情とは異なるが、恋愛感情の内容そのものは、ときめきや憑執的な感情など、成人の恋愛感情の中身にかなり類似している。

教師は、中学生と彼らが恋愛感情を向ける相手との関係性の側面だけから、彼らの恋愛をみているために、中学生の恋愛感情を軽んじ、恋に恋している気持ちや「友達」感覚であると認識しているものと推定される。そのため、中学生の中に秘められているときめきや憑執的な感情など、内容的には成人の恋愛感情に類似した恋愛感情を正しく認識することができにくいものと考えられる。

本研究の全体を通して、中学生は、男女とも、中学生としての恋愛の形に対する常識的な認識と自分自身の願望との間に乖離があることが明らかにされた。男女を比較すると、女子の方がかなり積極的であることが発見された。また、中学生の恋愛形態は片思いが中心ではあるが、彼らの恋愛感情は成人の恋愛感情に類似していることが示された。生徒の恋愛に対する教師の認識は、生徒の内面的な欲求を反映しているものではないと結論づけられた。

以上のように、本研究ではいくつかの新しい知見を得ることができた。また、本研究は、恋愛研究の分野において、中学生を対象にした比較的、大規模な調査であり、初めて、中学生の恋愛を実証的に検証した研究であるといえる。このような意味においても、本研究がもたらす意義は大きい。

引用文献

- Blos, P. 1962 *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. Free Press. (野沢栄司 (訳)
1971 『青年期の精神医学』 誠信書房)
第一学習社 1991 『現代高校生の“恋愛観”』 同社発行。
加藤隆勝・加藤 厚・斎藤誠一 1985 「思春期の身体発達の開始と心理的適応に関する縦断的研究」
筑波大学心理学研究, 7, 61-85.
桂 広介 1965 『愛情の発達心理学』 金子書房。
松井 豊 1993a 『恋ごろの科学』 サイエンス社。

- 松井 豊 1996 「親離れから異性との親密な関係の成立まで」 斎藤誠一（編）『人間関係の発達心理学 4 青年期の間関係』 培風館, 19-54.
- 松井 豊・井上果子 1994 『10代の教養図書館16 恋愛を科学する 恋する気持ちの心理学』 ポプラ社.
- 松井 豊・井上果子・宮武朗子・鈴木信子 1995 「中学生の恋愛意識 (1)」 日本教育心理学会第37回総会発表論文集.
- 皆川邦直 1980 「青春期・青年期の精神分析的発達論 -ピーター・プロスの研究をめぐって-」 小此木啓吾（編）『青年の精神病理 2』 弘文堂, 43-66.
- 宮武朗子・鈴木信子・松井 豊・井上果子 1995 「中学生の恋愛意識 (2)」 日本教育心理学会第37回総会発表論文集.
- 宮武朗子・鈴木信子・松井 豊・井上果子 1996 「中学生の恋愛意識 (4)」 日本教育心理学会第38回総会発表論文集.
- NHK世論調査部（編） 1984 『中学生・高校生の意識』 日本放送出版協会.
- 日本性教育協会（編） 1994 『青少年の性行動 わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告 (第4回)』 同協会発行.
- 竹之内美登里・安達喜美子 1992 「異性意識の発達について」 日本教育心理学会第34回総会発表論文集.
- 詫摩武俊 1973 「恋愛と結婚」 依田 新ほか（編）『現代青年心理講座 5 現代青年の性意識』 金子書房, 141-193.
- 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会（編） 1993 『1993年調査児童・生徒の性最新版』 学校図書.
- 鈴木信子・松井 豊・井上果子・宮武朗子 1995 「中学生の恋愛意識 (3)」 日本教育心理学会第37回総会発表論文集.

謝 辞

本調査の実施に当たり、神奈川県教育庁指導部義務教育課山崎久男先生、及び平成6年度神奈川県教育相談人材養成研究生、同じく平成6年度横浜市、川崎市内地留学研究生の先生方のご協力を得ました。記して、感謝致します。

付 記

本論文の作成に当たり、宮武は、第1調査の実施と分析、第2調査の実施とデータ解析、及び分析を行い、本論文を執筆した。鈴木は、第2調査のデータ解析と分析、及び本論文における結果の一部をまとめ、松井は、調査全体の企画運営、及び第1調査、第2調査の分析を行い、井上は、調査全体の企画運営、及び第1調査、第2調査の実施と分析を行った。